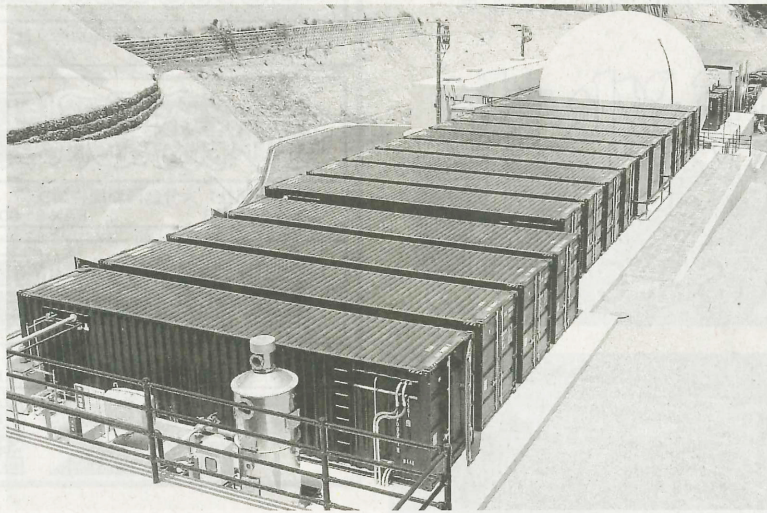


宇佐市 バイオガス施設落成式

「焼酎かす」発電開始

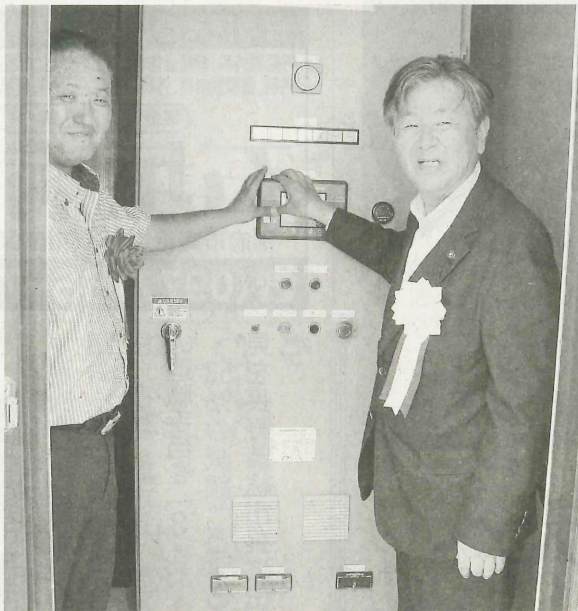
焼酎の製造過程で出た焼酎かすを燃料とするバイオガス発電所の落成式が27日、宇佐市日足地区であった。地場の総合エネルギー企業「未来電力」（末宗秀雄社長）が運営。自社工場内などでの発熱利用は多いが、発電利用は全国的に珍しいという。発電後に出る消化液も肥料として活用でき、再生可能エネルギーとして期待される。



運用開始した宇佐バイオガス発電所。焼酎かすを燃料とし、再生可能エネルギーとして期待される。27日、宇佐市日足

落成式は末宗社長や、同社にノウハウの提供をした日本プライスマネジメント（北九州市）の吉赫哲社長

ら関係者約70人が出席。末宗社長が「たくさんの方の支援や理解に感謝します。地域や社会に貢献していきたい」とあいさつ。神事の後、テープカットがあり、末宗社長がボタンを押して通電を開始した。



ボタンを押して通電を開始する末宗秀雄社長（右）

に残る焼酎かすなどを1日25〜30ト受け入れる。メタン発酵させて発生したバイオガスを燃やして発電する。発電量は年間約300万キロワット時。ガスを取り出した後に残る消化液から液肥を、固形物から堆肥を作り、関連会社のカボス園での活用や、地区内の農家に無償提供する。

八鹿酒造（九重町）では年間約1600〜1800ト、縣屋酒造（宇佐市安心院町）は、年間400〜500トの焼酎かすが産業廃棄物として出ており、一部肥料などに利用しているが、処理費用が高いという。

縣屋酒造の重松和孝社長は「試験的に利用し、経過を見て量を増やしたり契約を考えていきたい」と話す。

末宗秀平専務取締役は「宮崎、熊本など、各県の焼酎会社から問い合わせがあり、将来的に他県でも同じモデルで展開していきたい」と話した。

使用後は堆肥にし、提供

（藤本昌平）